



TITLE:

<Book Review>Louis J. Walinsky,  
The Planning and Execution of  
Economic Development, Mc-Graw-  
Hill, New York, 1963,xiii+248p.

AUTHOR(S):

本岡, 武

---

CITATION:

本岡, 武. <Book Review>Louis J. Walinsky, The Planning and Execution of Economic Development, Mc-Graw-Hill, New York, 1963,xiii+248p.. 東南アジア研究 1964, 1(4): 104-105

ISSUE DATE:

1964

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54861>

RIGHT:

いる。また、著者はマラヤ・シンガポール・サバ・サラワクからなる大マレーシア連邦が結成される過程において旅行し、昨年8月の結成後に本書を出版したわけである。この時期に書かれただけに、なかなか重要な点がつかまれている。オーストラリアがこの大マレーシア連邦の結成に、きわめて好意的なことが、そのふしぶしでうかがわれる。

内容は、シンガポール・クアラルンプール・マレーシアの3部にわかれ、追記としてブルネイがある。旅行記として、マレーシアの風物の敘述もたくみであり、human behaviorの描写にもすぐれてはいるが、とくに興味深いのは、政治的・文化的エリートとの面会記である。シンガポール首相リー・クアン・ユー、政治家のデヴィッド・マーシャル、共産党指導者のリム・チン・シオン、さらにクアラルンプールではマレーシア首相トク・アブドゥール・ラーマン、マラヤ大学経済学教授ウンク・アブドゥール・アジズ、作家ハン・スウィンをはじめ、多くのエリートに面接する。

もっとも、これら面会記を読むと、どうも旅行者の印象であり、かなり主観的・一面的だと思われるふしがないわけではない。たとえば、わたくしが知っているアジズ教授と、ここにあらわれてくるアジズ教授とは、だいぶんちがっている。はじめて会った外国人の思想や行動をとにかくいうのは、いかにむずかしいことか。

しかし、それが主観的・一面的であろうと、この人種構造の複雑な、そして国家としてのunityを実現することの困難なこの国の現状を、きわめてヴィヴィッドに描いたものとして、本書はまことに興味深い。今日のマレーシアについてのすぐれた紀行記だと思う。(本岡 武)

Louis J. Walinsky: *The Planning and Execution of Economic Development*. McGraw-Hill, New York, 1963. xiii + 248p.

著者ワリンスキーは、1950年代の約10年間、Robert R. Nathan Associates, Inc. の一員として、ビルマの経済計画の調査と設定とに献身した。かれの体験をとおしてのこの国の経済発展の経過は、かれの大著 *Economic Development in Burma*. 1951~60. に詳しく描かれている(本誌第1号書評参照)。

このビルマにおける長期にわたった経験、さらに加えて韓国・イラン・アフガニスタン・エルサルバドルおよびボリビアにおける短期間の経験をもととして、低開発国において経済発展がいかに計画され、いかに遂行されるべきか、それを non-technical な、また operational な方法で明らかにしようとしたのが本書である。だから、これ、*Economic Development in Burma* の副産物であり、続論であるといえよう。

本書は、第1部の Planning、第2部の Execution および第3部の Some Practical Approach とからなる。付録として、先進国と後進国との比較図表、低開発国の若干の経済指標、低開発国援助機関の表、アメリカおよびその他の諸国の低開発国援助概要、世界銀行借款概要、中ソの経済援助概要、および計画評価論があり、最後に経済計画に関する文献があげられている。

もともと本書は、低開発国における経済計画の立案者のために書かれたものであり、低開発国の経済開発理論ではない。どこまでも、実際に具体的に経済計画の設定と遂行に役立たしめようとするものであり、その意味で、きわめて、わかりやすいように努力が払われている。

とくに本書の価値としては、このワリンスキー氏の長い実際の経験がにじみでている点があげられる。しかも、かれが強調してやまないのはつぎの点にある。経済発展についての方式は決してひとつでない。それぞれの国のもつ条件や目的によって異なる。しかし、その成否は採用される目標・計画・プログラムおよび政策の現実性と継続性に、資源が利用され、計画が運営される効果性に、さらに事業の現実の困難性の認識とそれにもとづいての事業の遂行の決意とにかかると。この決意は外国から与えられるものでなく、どこまでもその国自身がくださなければならない。

わたくしは、この強調点はまさしくかれの多年の経験の結論であるとの感銘をうける。著者は、低開発国の政策立案者が、この決意のもとに、この書物を読んでほしいと切望しているのだ。

本書が詳しく述べている経済計画の設定と遂行については、原則的にわたくしには異論がない。だが、低開発国の経済計画立案ならびに遂行にあたるトップ・レベルのものが、いかにして現実的・継続的に決意を

もちうるか否か、ここに基本的な問題があるのではなからうか。ビルマ、インドネシアの両国の現実は、わたくしのこの疑問を裏づけはしないだろうか。

(本岡 武)

Clifford Geertz: *Agricultural Involution, The Processes of Ecological Change in Indonesia*. University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1963. xx+176p.

近年 C. Geertz の意欲的な労作が次々に公表されているが、彼が1956年に謄写刷りの形で発表した *The Development of the Javanese Economy: A Socio-Cultural Approach*. (The Center for International Studies, MIT.) は、かなり長い力作でありながらも出版されなかった。この書物は、歴史概説、生態学的適応の様式、権威体系、都市化、観念体系の五つの部分から構成されている。この内の最初の部分が enlarge されて出版されたものが本書である。

題名の中の Involution とは、人類学者 A. Goldenweiser が最初に用いた用語で、一定の形式が安定化又は他の新しい形式に変形することに失敗し、内容的により複雑化し続けるような文化現象を意味する。Geertz は、この概念をジャワの零細農業の在り方に適用して、その社会経済史的背景とそれが今後のインドネシア経済に持つ意味を本書において論及する。

Geertz によれば、インドネシアには二つの伝統的な生態学的体系 (ecosystem) が存在する。即ち、焼畑的な swidden 農業と水田稲作の sawah 農業を中心とする二体系である。前者は、より多く自然の条件に依存し、主に外領地域と西南ジャワに分布している。後者は、人為的条件に依存する度合いが強く、主にジャワ、バリ島、西ロンボック島に分布している。Geertz は、この二つの ecosystem の相違を歴史的に考察する。

オランダの植民地政策の基本原理は、経済に関する限り、終始、植民地の経済構造を根本的に変形させずに農産物を世界市場に持ち出すことであった。この目標達成に三つの方式が歴史上用いられている。東印度会社、栽培制度とプランテーション制度である。特にジャワを中心とした栽培制度は、上記二つの ecosystem

の対照を際立たせる素因となったばかりではなく、インドネシア経済の二重構造 (the capital-intensive Western sector and the labor-intensive Eastern sector) を確立することになった。swidden 地域ではコーヒーが、sawah 地域では砂糖が、輸出農産物として栽培を強化された。人口増加や生産方法の発展は、この二地域の区分を社会的にも顕著なものとした。swidden 地域では、無産化が進行すると共に、農業生産物は専門化し、個人主義的傾向が強まったが、sawah 地域では、involution が深化して、土地の使用・保有法、共同生活、宗教までも、この傾向を反映して、貧困は分有された。

インドネシア農民が急増した人口を吸収する適当な場を持たなかったこと、そして、現に持たないことが、インドネシア農業の生産性に致命的であることを Geertz は、さまざまな角度から分析する。しかし、本書のオリジナル・プランが、先きに触れたように、社会や文化の側面を含むものであるため、未だ総てが論じ尽されていない感があり、残余の部分の出版が待望される。

(口羽益生)

陳荆和：『十六世紀之菲律賓華僑』新亞研究所東南亞研究室（東南亞研究專刊之二）。香港。1963年。vii+161p.

東南アジア華僑に関する論著は数多いが、現状の分析、考察を主としたものが大部分で、歴史研究に重点をおいたものは甚だ乏しい。しかし現状の考察に資し、将来を推測する手がかりを与える点で歴史研究が重要なことはいうまでもなく、かかる意味で本書のごときを得たことは喜ばしい。

著者はかつて日本に学んだことのある人で、元国立台湾大学助教授、現在香港にある新亞学院の歴史学教授をつとめ、東南アジア史の研究では目下最も活躍している中国人学者の一人である。ベトナム史に関する論考や、史料の解説、紹介が多いが、本書は氏がかつてフィリピン華僑に関して諸雑誌に発表した論考を補訂、集成したものである。

スペインによるフィリピンの植民地化はフィリピン華僑史の上において画期的重要事件であった。これを契機として華商のマニラ貿易が発展し、華僑の著しい増加をみた。しかしこれはやがて、在フィリピンのスペイン人に華僑に対する恐怖と警戒心を生ぜしめた。